

高上山古墳に関する新資料

—『江藤正澄備忘録』から探る高上山古墳—

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

中牟田寛也（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

関西大学総合博物館が所蔵する鹿角刀装具の出土品について、従来から高上大塚古墳とする見解が示されている（註1）。岡部も歴史博物館紀要に掲載した「曾根古墳群の記憶」（註2）では高上大塚古墳に比定した。

しかし、その後、池田祐司氏から高上山古墳出土品の発見に関する江藤正澄の備忘録の存在をご教示いただいたことから、改めて当該古墳についての検討を行った。

資料が作成された記録の性格上、その内容や精度に限界はあるものの、当該資料からは、古墳の立地や構造、共伴した副葬品などの新たな知見が多く得られ、古墳の年代観や評価など今後の調査研究にも有意義と考えられるので、その成果を報告する。なお、執筆は岡部、中牟田が共同で行い、各項の末尾にその責を記した。

なお、今報告の契機となるご教示をたまわりました池田氏に厚く御礼申し上げます。（岡部）

【註】

1. 前原町教育委員会（原田大六監修）1973『前原町文化財地図』では、別冊地名表の高上大塚古墳の備考欄に「鹿角刀装具」の記載がある。また、前原町教育委員会1982『曾根遺跡群』中で高上大塚古墳について論じた柳田康雄は、鹿角刀装具出土の記載とともに『山本考古室要録』の実測図を掲載している。
2. 岡部裕俊2013「曾根古墳群の記憶」『伊都国歴史博物館紀要8』

2. 江藤正澄と『江藤正澄備忘録』所収記事

江藤正澄（1836～1911）の事蹟は、自筆史料（註1）、筑紫豊氏の基礎的研究（註2）が知られる。天保7年（1836）筑前国秋月藩士上野忠右衛門二男に生まれ、同藩の医者江藤良禎の養子となり、国学や故実を学ぶ。明治3年（1870）神祇官出仕後、県内外の神社神職を歴任、明治10年に致仕し福岡に戻った後、古書・古美術商を営みつつ様々な社会事業に携わり、著述を多く残した。典籍・古器物蒐集に熱心で、国学者・神職の素養に加え、明治19（1886）年に東京人類学会入会し先進的知識も貪欲に摂取した。多くの観点

で研究がある（註3）一方、膨大な関係資料に比して個別研究が十分でない部分もある。

「江藤正澄備忘録」（九州大学附属図書館所蔵江藤正澄関係資料）は、「江藤正澄備忘録 一」「江藤正澄備忘録 二完」（いずれも外題）と題する自筆本二冊から成る。同資料「二」収載の本文標題「○糸嶋郡雷山村字（挿入二字「高上」）古墳発掘所出〈明治39年／6月2日青柳林太郎持参〉」四丁分の記事（「目次」の項目名は「糸嶋郡雷山村高上古墳記 四枚」）は、明治39年6月2日に青柳林太郎が持参した当該古墳出土品の記録で、注記・注釈を伴う図、所見を記す本文より成る。

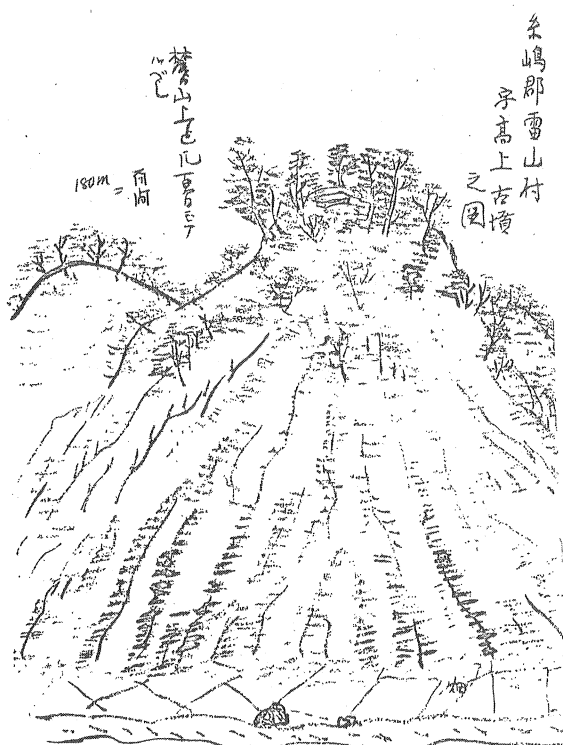
古墳景観図（第1図A）1点、石室見取図（第2図B）1点は立地や石室概要と計測値が記録され、出土品図10点分は江藤が熟覧観察の上模写したと見られる。一部出土品は、記事冒頭の注釈に「大坂市東区豊後町ハ新聞屋敷（挿入六字「大坂毎日新聞」）山本彦一氏へ仕出スナリ」とあり、現関西大学博物館「山本コレクション」を構成する資料の来歴を裏付ける。

「明治39年6月4日」（本文末尾）と、江藤が出土品に接した直後の著述であることから、自身の観察に基づく情報以外は青柳からの聞き取りによると思われるため、景観や石室見取図、計測値等の精度の限界は留意すべきであろう。

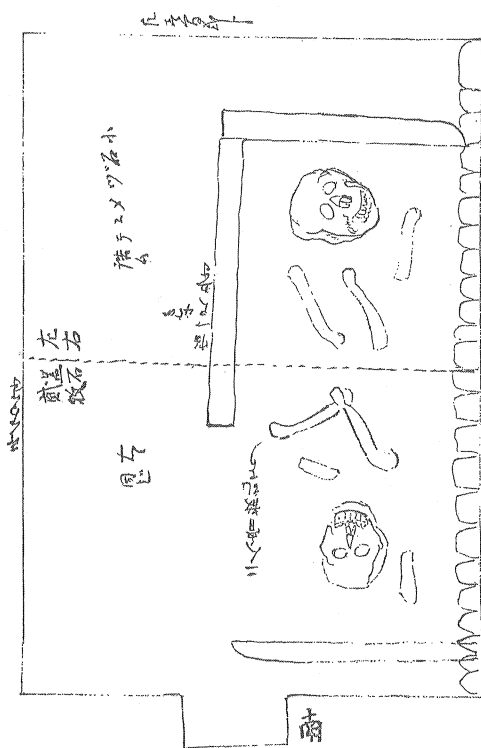
本資料は、明治44年に没する江藤晩年の著述で、長年の古器物に関する深い知見と洞察が発揮された比類なき記録といえる。（中牟田）

【註】

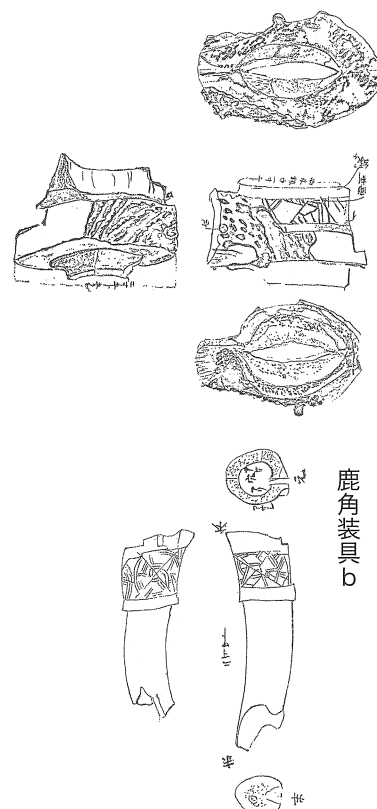
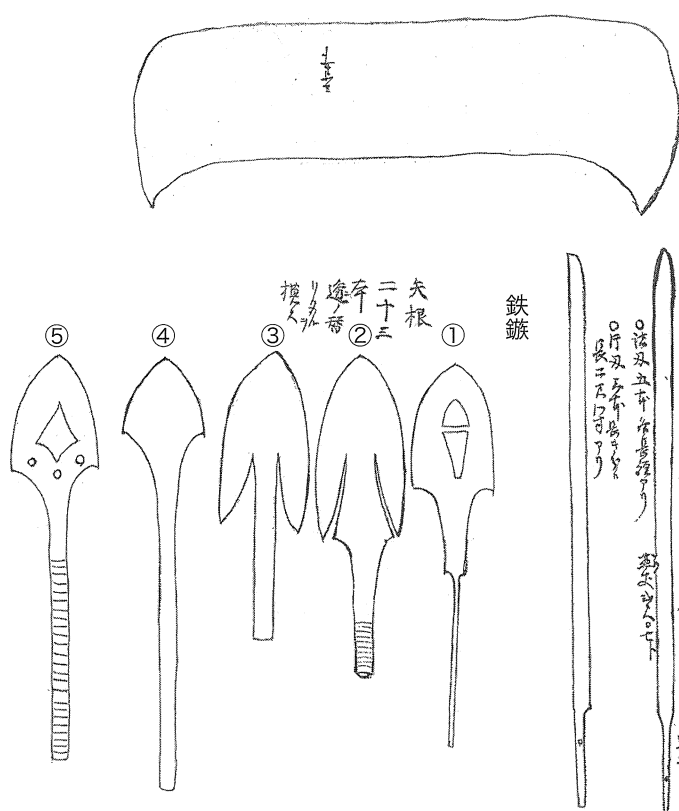
1. 「江藤正澄履歴正本写」（九州大学附属図書館所蔵江藤正澄関係資料）、「遺徳録」（福岡市総合図書館所蔵電子複写本（原本不明））。
2. 筑紫豊1954「江藤正澄自筆稿本「遺徳録」について」『図書館学』第3号、筑紫豊1969『江藤正澄の面影—秋月が生んだ明治の文化人—』秋月郷土館
3. 日比野利信2004「太宰府博覧会と菅公一千年祭」（『「古都太宰府」の展開太宰府市史通史編別編』）、菅波正人2006『江藤正澄と鎮西博物館』（『福岡市博物館研究紀要』16号）、三浦泰之・山本命2012「筑前国の「好古家」江藤正澄と松浦武四郎—江藤正澄「遺徳録」を中心に」（『北海道開拓記念館紀要』40号）など。



A. 高上山古墳と周辺の地形



B. 石室聞き取り図



C. 出土遺物模写図 (遺物図は再配置 縮尺任意)

第1図 「江藤正澄備忘録」に記された図

3. 調査・検討の成果

(1) 古墳の位置と現状

古墳の位置について、これまでは漠然と高上地区の山稜上に所在するという認識に留まっていたため、この地区の前方後円墳として知られた高上大塚古墳がその候補とされてきた。しかし、備忘録に示された古墳図をみると山の麓の畑地から急峻な斜面を登った頂に石棺状の埋葬施設が描かれており、背後には山並みも描かれている。また、麓から百間ほどの距離であったことが示されている。高上大塚古墳は、曾根丘陵上の高所にあるというものの古墳裾にあった農地との標高差はせいぜい10m、距離的にも50mほどしか離れておらず、また図に示されるように背後に山並みは続かないので、遺物を持ち込んだ青柳林太郎からの伝聞であることを差し引いても立地イメージが大きく異なり、気にかかるところとなった。

『福岡県地理全誌』141の高上村の項には「高上山」と称される一峰が集落南端の南五町に所在するとされる。この山稜一帯には後期古墳が点在することが知られるが、この他にも本市で未確認の「高上山古墳」が存在する可能性が出てきた。

一帯を足早に踏査したものの、残念ながらいまだその所在を特定するにはいたっていない。踏査は引き続き行う予定である。(中牟田・岡部)

(2) 埋葬施設

埋葬施設について、発掘者の青柳によれば小石積みの石室であったとする。当該地方の石室の変遷を考慮すれば、小石積みと割石の小口積みであったと考えられ、竪穴式石槨か初期横穴式石室

である可能性が高い。江藤の石室見取り図によれば、石室は長さ2.7m、幅1.8m、高さ2.1mほどの平面プランが幅広の長方形で、丈の高い空間を有していたことがわかる。石室内への土砂の流入は少なかったとみられ、また、遺物の出土状態から未盗掘であった可能性が高い。

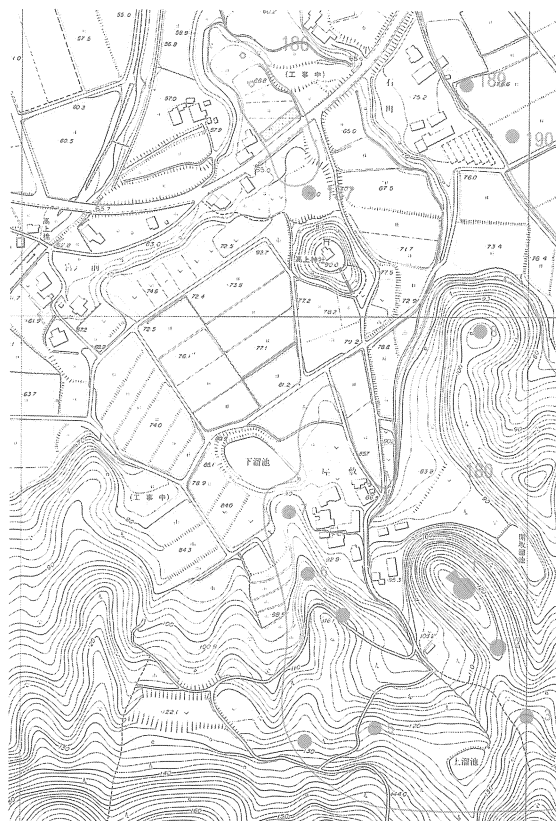
南壁中央に凸字状に外に向かって張り出しが描かれていることから、閉塞状態を保った両袖式の横穴式石室で、袖部は板石を立てたのみ、閉塞石も一枚の板石で塞がれていたものと考えられる。天井石は2枚とされることから天井面積も広く、したがって壁面の持ち送りも緩やかだったと考えられる。イメージ的には本市内の長嶽山2号墳(写真2)の石室が想起される。(岡部)

(3) 埋葬棺

東側壁に沿って板石に仕切られた区画があり、そこに幅45・5cmの補記がある。これを仮に箱式石棺とすると、糸島地方で使用する古墳時代前～中期の箱式石棺の内法巾が35～50cmほどであるため、その平均値に近い値を示す。しかし、この板石の区画についての長さの数値が示されてい



写真1 高上地区南部の山並み



第2図 高上山周辺の地形と既知古墳の分布

ない。また、側壁寄りの板石と東南角近くの側石も描かれていないところが気にかかる。

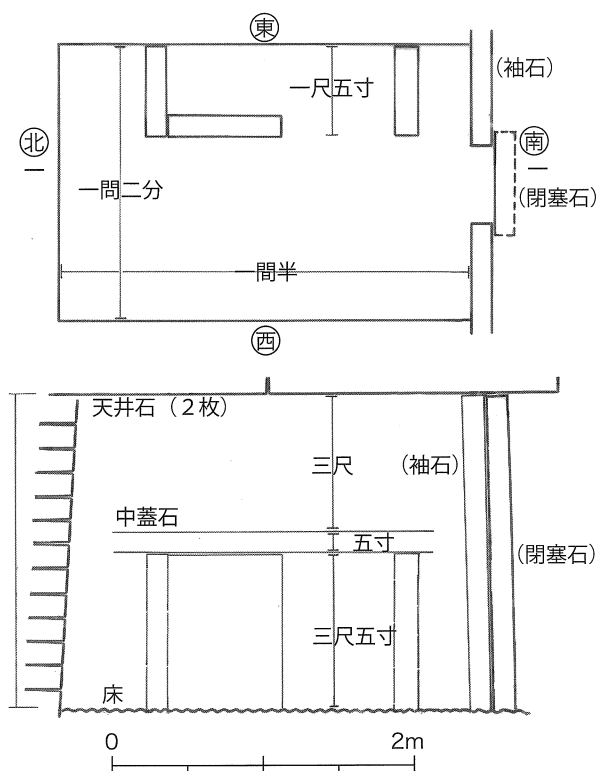
さらに理解に苦しむのはその立面構造である。床から中蓋石までの高さが 106cm ほどあったとされるが、中蓋石が石棺の蓋石を示すとすれば第 3 図のように丈の高い石棺に復元される。このような石組みの埋葬棺として類例候補を上げると、石屋形や横口式家形石棺なども想定されるが、現在のところ当該地方においてこの種の埋葬棺の発見例は報告されていない。

また、備忘録では、石室の上にも別の埋葬施設があり、2 体分の遺骸が検出されたという記録も筆者には理解が及ばないところである。(岡部)

(4) 副葬品

副葬品として、短甲、大刀、剣、刀子、鹿角製装具、鏃の出土が記録されている。

短甲 浅い U 字形を呈する幅広の鉄板の図があり(第 1 図 C)、江藤の推定どおり短甲後胴の押付板と考えられる。備忘録に記された「威毛」のような「漆質の物」ならびに「赤糸」のような繊維質の付着は、錆着した綴皮紐とみられることから、



第 3 図 高上古墳の石室の模式図

皮綴短甲であった可能性が高く、他の数枚の板金が外れて原形を留めていなかった状態であったこともうなずける。

京大報告(註 1)には、短甲ではなく漆塗冠帽の出土が記されているが、「備忘録」にある繊維状の付着物の記述から冠帽と誤認したのではないかと考えられる。

剣 出土した 3 本の剣うち、図示されたものは長さ 63cm、刃部 50cm 弱、柄長 13 cm、幅 4 cm ほどとされる。模写図では関が鈍角で柄の中ほどには目釘孔 1 孔が認められる。

大刀 5 本出土したうち、図示されたものは全長 85 ㌢ほどで、こちらも茎の中ほどに目釘孔が 1 孔認められる。

刀子 マキリ二個と記されるのは刀子と考えられ、小型の鹿角装具が小刀用であることからこれに伴っていたのかもしれない。

鉄鏃 23 本の出土が報告されており、このうち江藤が「透ノ替リタル」とした 5 本の平根式鉄鏃の模写図が掲載されている。(註 2・3)

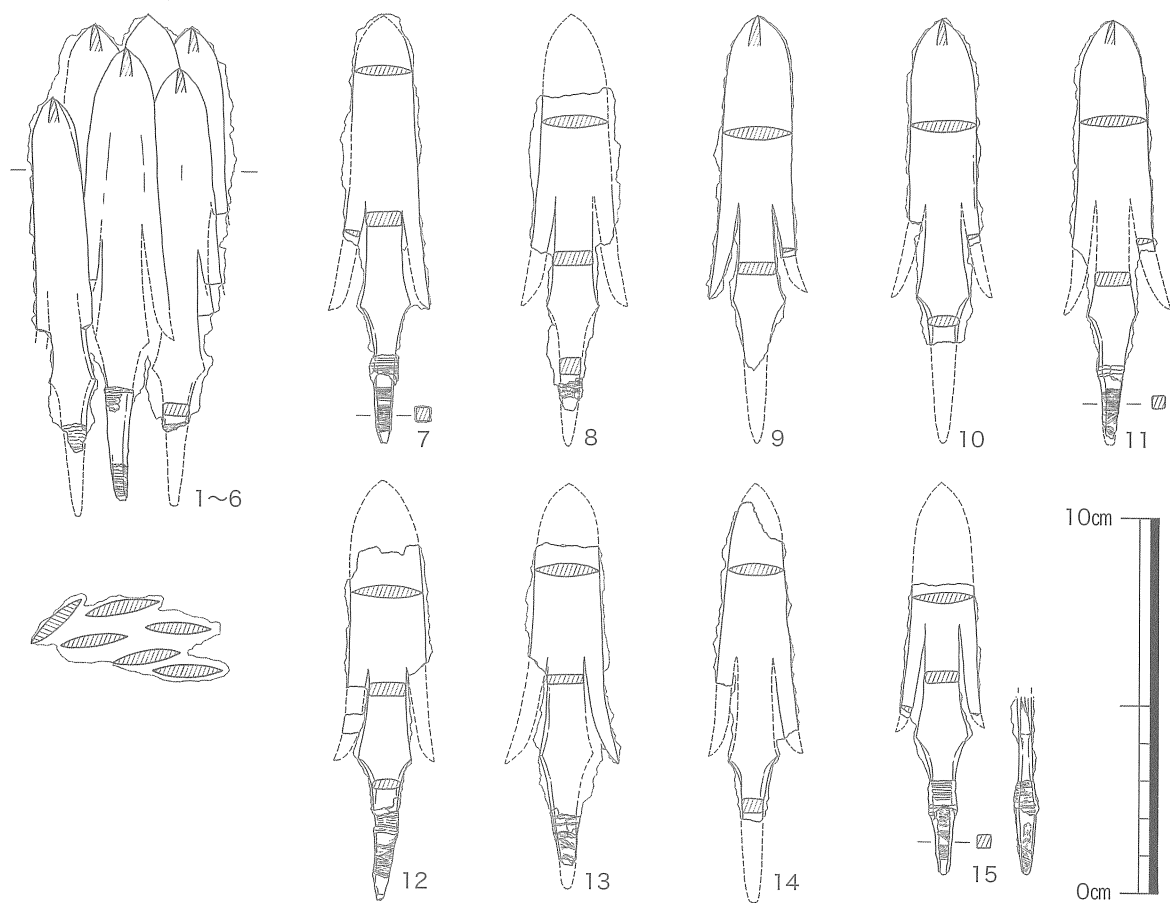
図示されたうち三本は三角鏃、2 本は腸扶柳葉鏃とみられる。①～③は、ナデ関で茎部がいずれも長い。②には縦に並ぶ三角形と逆台形、③には菱形の下に 3 個の小円形の透孔が設けられ、③は角関を有する。

④、⑤は身幅が広く描かれており。④は山形関を有し、深い切れ込みをいれるが、逆刺の外縁は直線的であり開かない。

鹿角製装具 2 点が図示されており、実資料を関西大学博物館が所蔵することが知られ、井上一樹による詳細な考察がなされており(註 4)、詳細はそちらに譲りたい。(岡部)

【註】

1. 浜田耕作 梅原末治 1923 『近江国高島郡水尾村の古墳』京都帝国大学文学部附録 日本発見金製耳飾、刀剣環頭及び鹿角製刀剣装具集成 110 頁
2. 水野敏典 2003 「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第十四の分類、各部呼称に従う。
3. 末永雅雄 1935 『富民協会農業博物館 本山考古室要録』
4. 井上一樹 2010 「関西大学博物館所蔵鹿角刀装具の直弧文」『立命館大学考古学論集 V』



第4図 二丈浜窪箱式石棺墓出土鉄鏃実測図（1 / 2）

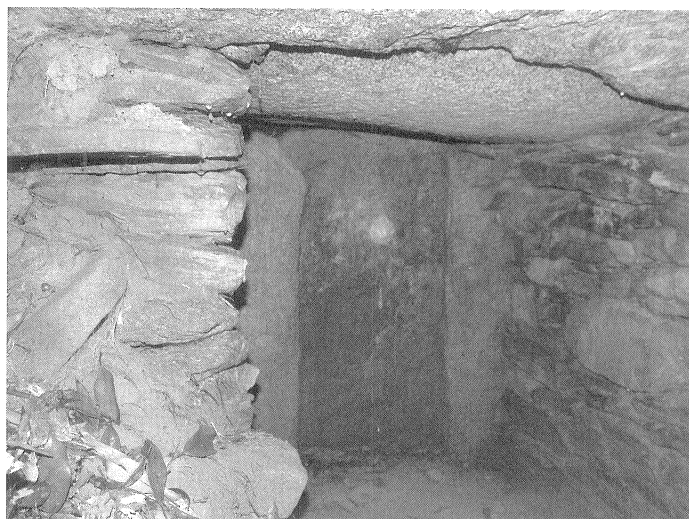


写真2 長嶽山2号墳横穴式石室（奥壁から前壁をのぞむ）
前壁の袖および閉塞石とともに薄い板石を立てて配する。高上山上古墳
石室前壁を髣髴とさせる。

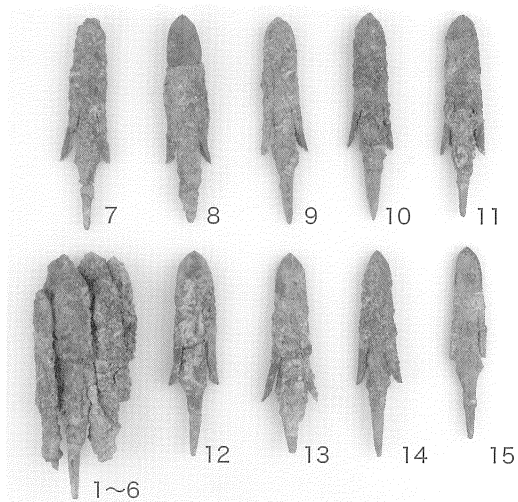


写真3 二丈浜窪箱式石棺出土鉄鏃
第3図鉄鏃の現況写真。蓋石上に棺外副葬されていた
とされ、束ねた状態を保つものもある。身部は長大
化し逆刺は深い。

4. おわりに

高上山古墳について、備忘録の記述内容によって従来比定していた高上大塚古墳とは異なる未確認の古墳である可能性が出てきた。

主体部は古式の横穴式石室であることが想定され、重藤輝行分類の初期横穴式石室A類（註1）に該当すると考えられる。人骨が2体検出されていることから、追葬も行われていた可能性が高い。

しかし、埋葬棺は石室主軸に沿って一基が描かれているだけで、また記述内容からだけでは構造が把握しづらく、この詳細を明らかにするには、古墳の所在を確認することが重要となってきた。

出土遺物の中では鉄鏃に注目したい。模写図で示された鉄鏃は三角鏃と腸扶柳葉鏃の二種で、このうち腸扶柳葉式鏃にみられる山形関についてはその盛行期が五世紀前半とされる（註2）ことは、古墳の築造時期を絞り込む上で有効と考える。

市内で山形関を有する鉄鏃がまとまって出土した例としては二丈浜窪箱式石棺（古墳）出土の鉄鏃がある（第4図・写真3）。詳しい調査は行われていないが、板石を木口積みした石棺系石室の天井石の上に棺外副葬されていたとされる（註3）。同種の石棺は当該地方では初期横穴式石室の影響下で5世紀前半に盛行すると考えられている（註4）ことから、この種の鉄鏃の編年の位置づけとも齟齬はない。

出土した短甲について、玄界灘沿岸における甲冑出土例として情報を追加できたことも成果のひとつといえる（註5）。皮綴短甲の可能性が高く、この種の変遷のなかでは5世紀中葉が皮綴から鉾留への移行の画期と捉えられていることも（註6）、当該古墳の築造時期を推定する上で有効である。

以上、高上山古墳について横穴式石室の構造や出土遺物の検討から、築造時期は概ね5世紀前半期内に収まると考えられる。

高上山古墳の評価にあたり、近隣地域の甲冑出土古墳に目を移すと、老司古墳3号石室（福岡市）、永浦4号墳では短甲とともに大刀、鉄鏃など豊富な武器が出土し、腸扶柳葉鏃が複数本出土していることも共通している。これらはヤマト王権からの下賜品と位置づけられ、相互の密接な政治・軍事的連携の象徴と捉えられている。高上山

古墳でも、追葬による副葬品の追加を差し引いても、鉄刀五本、鉄剣三本、短甲、鉄鏃などの豊富な武器や武具が出土したことは、被葬者の軍事的な貢献がヤマト王権との関係深化の背景にあったと考えられる。

当該古墳がどのような形態、規模を有するのかも興味惹かれるところである。高上山古墳の石室は、重藤の初期横穴式石室A類に該当することから、石室規模においては当該地域における上位層の古墳に位置付けられるが、同時期に築造された丸隈山古墳、釜塚古墳などの海岸線に展開する大首長墳と比較するとその規模は小さく、雷山川上流の山間に築かれた立地環境と合わせて考慮すれば、河川水系流域を統括した首長レベルと推定される。

この時期、当該古墳の近隣では井原南田古墳、西堂四反田1号墳など、鹿角装具を備えた刀剣類が相次いで出土している（註7）。これら被葬者がヤマト王権下において、また、当該地方でいかに位置付けられた存在であるか、またその性格を検討するうえでも興味深く、今後の継続的な検証も必要と考える。（岡部）

【注】

1. 重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」『日本考古学』2巻2号
2. 橋本達也2004「6.鉄鏃」『永浦遺跡第1次・2次調査』古賀市教育委員会
3. 原田大六1969『伊都国王墓展』図録 フクニチ新聞社
4. 重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」『日本考古学』2巻2号
5. 竹内理三編1982『日本歴史地図 原始・古代編上』柏書房では、短甲出土古墳として図上にプロットされている。
6. 橋本達也2004「永浦4号墳の甲冑セットとその意義」『永浦遺跡第1次・2次調査』古賀市教育委員会
7. 岡部裕俊2013「曾根古墳群の記憶」『伊都国歴史博物館紀要8』

「怡土城」築城における人間模様

—藤原仲麻呂と吉備真備・佐伯今毛人—

瓜生 秀文（糸島市教育委員会文化課）

1. はじめに

「怡土城」は（註1・図1）、8世紀半ば、福岡県糸島市高来寺・大門・高祖に所在する高祖山（標高416m）の西斜面に築かれた古代山城である。

当時、日本と新羅間の国際関係が悪化して新羅征討の気運高まる中で、大宰府防衛の西の拠点として築城されたものと考えられている。東は山頂の稜線、北は尾根、南は谷、西は山裾を境としており、全周6.5km、城内面積は約290haに及ぶ。

現在でも北辺に5ヶ所、南辺に2ヶ所の望楼跡・礎石群のほか、西に2ヶ所の礎石が残っている。特に全長約2kmに及ぶ土塁は残存状況に恵まれ、往時の城域の構造がよくわかる。

怡土城の築城期間・担当者・経過などについては『続日本紀』に記録されており、その築城担当者として、「吉備真備」・「佐伯今毛人」の2人が確認できる（註2）。小稿では怡土城の築城を指揮した2人と当時政権の中枢にいた「藤原仲麻呂」（註3）との関係を通じて、怡土城築城の影に見え隠れする人間模様（註4）について若干ではあるが考察することにする。

2. 藤原仲麻呂と吉備真備（図2）

最初に怡土城の築城を指揮した吉備真備（註5）は持統天皇9年（695）、下級官吏下道朝臣罔勝の子として生まれ、宝亀6年（775）10月2日に薨じた。享年83歳（薨伝では81歳）。極官は右大臣であった。

吉備真備は僧玄昉とともに橘諸兄（註6）政権のブレーンであった。ところが、橘諸兄政権の弱体化とともに藤原仲麻呂が頭角をあらわし、まず、僧玄昉を造観世音寺長官として筑紫（九州）に左遷する。結果として、天平18年（746）、僧玄昉は観世音寺の落成式の際、藤原広嗣の亡霊（支持者）に暗殺される。（註7）

次に藤原仲麻呂は吉備真備も筑紫に遠ざけ、筑前守、そして俄かに肥前守へと左遷する（註8）。

当時、筑紫（九州）のなかでも特に肥前地方において反政府的動向が見られたようだ（註9）、その一例として、天平12年（740）、乱を起こし「大宰少貳」から謀反人となった「藤原広嗣」を値嘉嶋の人々（肥前国の海人）は済州島の近くまで逃亡するのを加勢している。さらに、刑死後には「弥勒知識寺」をも建立し、その死を弔っている（註10）。こうしたことから、僧玄昉の暗殺は筑紫における藤原広嗣の支持者によるものと考えられている。藤原仲麻呂はこれらのことをふまえ、吉備真備も僧玄昉と同じ運命にあわせようと考えたのであろう。

しかし、吉備真備はその危機をうまくかわす。さらに、藤原仲麻呂は吉備真備を遠ざけるため、天平勝宝3年（751）、遣唐副使として唐へ派遣する（註11）。当時の遣唐使は南島路もしくは南路による渡海であったため難破・遭難率が高かった。吉備真備も帰路で漂流はするものの、帰国を果たす。

思惑がはずれた藤原仲麻呂は天平勝宝6年（754）、吉備真備を「大宰大貳」に昇格させ、さらに怡土城築城の専当官に任命する（註12）。これは吉備真備の軍事方面の才能を活用しつつ、吉備真備を大宰府に釘付けにする巧みな人事（政略）であった。大宰府の10年間、吉備真備は藤原仲麻呂の巧みな政略に屈することになる。

3. 藤原仲麻呂と佐伯今毛人（図3）

吉備真備と中途交代し怡土城の築城を指揮した佐伯今毛人（註13）は養老3年（719）に佐伯人足の子として生まれ、延暦9年（790）10月、薨去した。享年72歳であった。造東大寺長官・造西大寺長官などを歴任し、「東大寺居士」とも称せられた。また大宰府の長官に何度も任命され、極官は民部卿であった。

光明皇后が政治の実権を掌握すると、藤原仲麻呂の権力は急激に増大する。藤原仲麻呂の昇進と強大な権勢は、中央貴族の間に追従する一派と反